

廿八日 午前八時ヨリ石炭ヲ積ミ始ム正午ヨリ右舷一倍上陸ス^{ママ^⑩}
廿九日 午前艦内大掃除ヲナシ正午ヨリ左舷半舷上陸ス
卅 日 午前八時ヨリ右舷二部上陸ス午後三時ニ「マルタ」出艦

り
と
二
二
八
二
⑩
八

注

- ① 以降に示される名簿の一頁目は縦書きとなっているが、本稿では横書きに改めた。
- ② 「悌」か。
- ③ 氏名抜け。名簿内の他の空欄も同様。名字のみ書かれた箇所も資料の通り。
- ④ 「兼」か。
- ⑤ 「留」か。
- ⑥ 「拵」か。
- ⑦ 「助」か。
- ⑧ 「坎」か。
- ⑨ 「晒」か。
- ⑩ 「饒」か。
- ⑪ 翌年十二月十二日の記述と合わせて見るに、「条」の誤記か。
- ⑫ 前後の文脈から、「荒」か。以降の「流」も同様と思われる。
- ⑬ 「艘」か。
- ⑭ 「発射」の意か。
- ⑮ 前後の日付から、「二月」の誤記と思われる。
- ⑯ 「部」か。
- ⑰ 軍隊内の所属等を示す符号かとも考えられるが不明。

廿九日 午後一時ヨリ五時迄毎日半舷上陸ヲ許サレタリ日
土ノ両日ハ許サレス

明治三十二年二月十二日迄ハ別ニ書キ置ク事ナカリキ

〃十三日 午後二時四十分ニ河口ニ下リタリ

十四日 午後二時常◆磐艦回航委員来ル

十五日 別条ナシ

十六日 午前九時半大砲發^⑭弱ノ為メ沖ニ出デテ十二時半

ヨリ打チ始メ二時四十分ニ終リ四時ニ「ジャロー」ニ帰港」

マ^⑮月十八日 浅間艦内ニ於テ芝居有之我等半舷見物ニ行
マ^マタリ

廿四日 三時半頃「ドック」ニ入ル

廿八日 午後四時二十分「ナインドック」ヲ出テ「シヤロー」ニ下ル

三月 一日 火薬ヲ^{マ^マ}漬ム

二日 石炭ヲ^{マ^マ}漬ム三日同様四日艦大掃除ヲナス

五日 午前ヨリ外舷ヌリ方ヲ始メル六日出艦用意ヲナス

七日 午前十時「シヤロー」河口ヲ出艦ス

八日 午後十一時「ポートマース」軍港入口ニ碇^{マ^マ}泊ス

九日 午前十時錨ヲ上げ同十二時「ポートマース」軍港ニ入港

午後ニ「イカツチ」水雷艇入港

十日十一十二日半舷上陸ヲ許サレタリ

十三日 当港ニ碇泊シ居タル英国軍艦ノ◆士官本艦ヲ見物ニ来リ

十四日 午前八時ヨリ総員ニテ石炭積ミタリ午後四時迄ニ四百五十噸ヲツム

十五日 午前六時ヨリ我等「ロンドン」見物行キタリ「ロンドン」ハ世界
第一ノ都トテ見ル物聞ク物驚クノ外ハナカリキ

十六日 午前十時英国「ポートマース」軍港出艦ス

十七日十八十九日航海中清天

廿 日 午後三時英国ノ領地「シブラルタ」港ニ碇泊ス

廿一日 午前ハ石炭積ミ午後半舷上陸ス

廿二日 午前大掃除午後半舷上陸ス

廿三日 午前十時「シブラルタ」出艦廿四日此日波流クナリタリ」

廿五日廿六日ハ益々波流クナリタリ

廿七日 英国ノ領地「マルタ」軍港ニ午後五時半ニ到着ス

又ハ油ヲ積ミ込ミタリ

- 五日 午前三時米国「ニューヨーク」港ヲ出艦セリ
- 六日 此日清天ニテ何事ナク進行セリ
- 七日 此日モ別祭^{ママ①}ナシ
- 八日 此日午前ヨリ大風吹き来リ波流^{ママ②}クナリタリ
- 九日 此日ハ益々大風雨ヲコリ波高クナリ兵員一同ハ弱リタリ
- 十日 此日愈大風雨トナリ英国ニ向ヒタルトキハ艦^⑬六ヶ敷又兵員モ弱リ居ルコト故進行ノ見込ナク夫レ故機関ノ回転ヲ減シ亜佛利加^{ママ}ニ方ニ向ケ流サレ居タリ
- 十一日 小々天気模様宜敷成リ英国ノ方ニ向ヒタリ
- 十二日 次第ニ宜敷成リ進行シタリ
- 十三日 此日ヨリ平日ノ如クナリタリ十七日迄ハ何事無ク進行セリ
- 十八日 午前四時英国「フリマース」軍港ニ到着セリ
- 十九日 午前七時ヨリ石炭ヲ積ミ始メ十一時ヨリ左舷半陸ス我ハ左舷ナレバ此時陸上ニ行き諸所ヲ散歩ス
- 廿日 午前十一時ヨリ右舷半舷上陸ス
- 廿一日 午前八時「フリマース」軍港ヲ出艦セリ
- 廿二日 午前四時霧ノ為メ「フリマース」ヲ出デ、ヨリ二百哩ノ程リタル所ノ山岸ニ投錨シタリ英国ナレトモ所名ハ不明ナリ此所ニテ天気模様ヲ見合居タリ
- 廿三日 午前四時当地ヲ出艦セリ
- 廿四日 午後三時ニ英国「ニウカツスル」河口安着シタリ
- 廿五日 本日午前八時ヨリ「ニウカツスル」「アムス」会社ノ棧橋ニ横積ニナス為メ「マスト」ノ長キヲ切り下ゲ方ニ付職工^{ママ}来リタリ廿六七日ノ両日ヲ以テ切り下ゲタリ
- 廿八日 午後七時ヨリ河口ヲ上リ始メ全四時頃「アムス」会社着キタリ此会社ニハ浅間艦等ヲ製造シ居タリ浅間艦回航委員等ハ先ニ乗艦シ居タリ同艦ノ人員ハ笠置艦今日入港ノ説ヲ聞キ今ハ来ルカト待受居リタル処ナレバ見ルヨリ早く笠置艦^{ママ}万歳々々ノ大声天地ニ轟ケリ故二本艦ノ人員ハ入港ノ節ナレバ総員ハ早速浅間艦万歳々々ノ大声ヲ上ゲタリ

ヘテ坂路ヲ登ル

- 九月 八日 木曜日朝ヨリ霧ノ為メニ市中ノ状況判然見ル不能
 小山四方ヲ囲ヒ山間ニ川アリ流レニ添フテ線路アリ下リ
 列車ニ逢フ其迅速ナルコト矢ノ如シ午前七時過キヨリ一天
 雲ナク之遠望スレバ市村ノ有ルコト算ウ可カラズ是畢意東
 海岸ニ近ク故ニ全九時「エツキステレー」ト云フ停車場」
 ニ着ス暫時休息シ此地此地ニ米国陸兵アリ「キユバ」
 人種ノ陸兵数十名ヲ見タリキ全十時又々漠々タル平垣ノ地
 ニ出テ此地ハ大陸旅行中ノ最上ノ濠地ト是ヘ其作物
 ノ豊熟樹木ノ繁茂ハ深々トシテ幽々極メ自ラ天然ノ公園
 ヲ見ル如シ次ニ大ナル市街ノ南側ヲ通ル之レハ「ヒヤデルフヒ
 ヤ」ナラント忙ハ敷ク下車ノ用意ニトリ掛リ行くコト凡ソ三時
 即チ午後一時「ヒヤデルフヒヤ」ニ到着シ即時新造軍
 艦笠置号ニ乗艦セリ本艦ノ工事モ半バ出来シモ試
 運ノ際汽缶ニ故障アリ其復古工事室内ノ飾装食卓
 取付衣服箱ノ備方ニテ艦内ハ大ニ繁ヲ極メリ
- 九月 九日 金曜日清天艦内ノ工事ハ益々繁忙ナリシモ当日ヨ
 リ毎日半舷上陸ヲ許サレシニ我々左舷直ハ上陸シタリ
 又十日ヨリ十月廿三日迄ハ毎日半舷上陸ニテ「ヒヤデルフヒヤ」
 市ヲ散歩シ種々珍ラシキ者ヲ見タリ
- 十月廿四日 午前十時笠置艦ヲ受取同時軍艦旗ヲ揚ゲ会
 社長其他ノ掛リ員ノ人々来リ酒縁ヲ行ヒ又遊芸等アリタリ
- 廿五日六七八日 此日ハ出艦用意ニ取掛リタリ
- 廿九日 此日ヨリ石炭ヲ積ミ掛リ卅一日迄ニ千二百噸ヲ積ミ込タリ
- 十一月 一日 出艦用意ヲシタリ
- 二日 正午十二時ヲ以テ米国「フヒヤデルフヒヤ」[クランプ]
 会社出艦会社長ヲ始メ其他市中人民◆◆觀送人
 ハ小汽蒸船ニ乗シ我等首途ヲ祝シタリ此川ノ長サ九
 十哩モ有之故午後六時川口ニ出テ碇泊シタリ
- 十一月 三日 午前六時ニ当所出艦シ午後三時沖ニ碇泊セリ
 此日ハ天長節ノ日ナレバ其式ヲ行ヒ午後十二時ニ出艦ス
- 四日 午前六時ニ「ニウヨーク」港ニ到着シ午後七時ヨリ石炭

五時間計リ外出シ市街ヲ見物セリ「チカゴ」市ハ「ミシカン」湖ノ周回幾千里ノ南岸ニシテ市中縦横幾百トナク運河アリ千噸以上ノ汽船幾百トナク此河ヨリ「ミシカン」湖岸ニ運送セル者ノ如シ此河ニ架セル鉄橋又何百トナク都テ水圧ノカヲ以テ橋ヲ左右ニ開キ汽船ノ通行ニ便ナラシム市内道路ハ上中下等ノ三種ニ分ケ上部ヲ電気鉄道中部ハ市街ニシテ中ヲ車馬道兩側ヲ人道トシ最下部ハ汽車ノ鉄道線路ナリ此市尤モ目立者ハ二十三階ノ建物ニシテ最上部ハ芝居其次ハ演説場其次ハ市會議事堂其四ヲ裁判所其尤モ最下部土地平面ノ所ハ勸工場其下部ハ理髮飲食ノ諸店アリ残り十八階ニハ諸商店見セ物等ノ由ナレトモ之ヲ残ラズ見物ナサバリキ但シ此の二十三階ニ昇降スルニハ凡ソ二◆間四方ノ乗り台ニ乗シ電汽ノ動作ニ昇降ス最頂部ニ登樓シテ四方ノ狀況眼下幾千丈ノ下ニ望ムガ如ク米国一二ノ大都會モ世界ニトナキ「ミシカン」湖モ實ニ眼前ニ在リテ宛ナラ太平洋ヲ見ルカ如シ」又市街ノ廣大ナルハ一目渡ル可ラス午前十一時三十分發車發車ス行々左側ニ石油製造所及ヒ「ミシカン」湖ニ汽船ノ航行スルヲ見テ東南ノ方向ニ進行セリ途中汽缶水及ヒ石炭ヲ積ミタル毎ニ停車場ニ止リ十五分及ヒ二十分間位休息ス其停車場毎ニ米人老若トナク我等一行ヲ迎フルガ如ク人山ヲ築ケリ其応接離別ニ至テハ異域ノ者ト侮ラス其情深キコト我国人ノ及ブ所ニアラス此日ハ至ル所人家ニシテ樹木作物ニテ至ルマテ前日ニ増シテ見可キアリ牛馬豕牧土前ニ異ナラズ午後七時十五分「ソロー」ニ着ス此処ニテハ夜中ノコトトテ市中テ見物ヲ為ス可ラスト雖十五分外出ス此ノ停車場ニ男女老若トナク集ルコト何千ナルヲ算ウ可ラズ其土地人民ノ情ノ厚キコト此土地ヲ以テ極程トス此所ニテハ愈愛恋ノ情軫々禁スル能ハサリシナリ宛ラ後日髮引カル、ノ感情アリテ又愉快ノ極度モ此地ヲ以テ第一トス是レヨリ行々市村ノ大ナル者數限りナク常夜ノ電灯散爛タルヲ見レトモ夜中ノコトトテ判然見ル不能十時頃ヨリ山中登坂トナリ汽缶車一輛ヲ加

終ニ心神勞シテ寝ヲ就ク

九月 五日月曜日 午前六時起床四方ヲ望メバ只漠々トシテ右側

路上ニ死牛アリ 鷺ニ羽其内ヲ喰フヲ見ル午後二時「ウ
エルストーン」ニ停車ス居ルコト二十分此処ニ二十分外車ス」
サレトモ見ル程ノ村落ニアラズ此日四方漠々タル原野
ニシテ只牛馬ノ牧蓄所々ニ満チ或ハ土人ノ天幕ヲ張
リ広原ニ居住スルト牛馬ノ斃レテ骨ヲ路傍ニ洒^{ママ}ス者ノ二三
ニシテ外国ニ止マラサルノミ如何ニ大広原ナレバトテ是
等死骨掃除スル^{ママ}ノ人ナキトキハ驚クノ外ナキナリ

九月 六日 火曜日晴天払曉ヨリ到ル処村落ニシテ樹木大

ニ繁茂シ農家ノ耕ヲ見ル又此土地ニハ小ナル湖水
アルコト拳テ算ウ可ス又牛馬ノ牧蓄モ一層盛ニシテ豕牧未
牧モアリ当米国ハ都テ牛馬ヲ使用スルニハ式頭並行
ニシテ乗馬ノ土人モ又然リ午後二時十五分「セントポール」
ニ着ス全時ヨリ五時三十分迄外出ヲ許サレ市街ノ重ナル
所ヲ見物ス其尤モ目ヲ注キタルハ會議事堂ニシテ是ヲ見物セ
シニ中ニハ殆ント博物館ノ如ク百種百物ヲ裝飾シ三階
目ニハ議事堂アリ十階目ハ運動場夫レヨリ十二階梯子
(五段乃至十三段ノ) 頂上マテ廿五階之ヨリ四方眺望スレバ
市街ハ眼下ニ見ヘ実ニ広大ノ稀地ト云フ可シ其次ハ鉄橋ニシ
テ之ヲ世界第一ノ「ミシシッピー」河ノ上流ニ架セル者ニシテ其
数モ亦幾百ナルヲ知ラス其三ハ停車場梁行略百間桁行
キ五百間余汽車ノ往復麻ヲ織ルカ如ク市中ノ商家ハ五階
七階中ニハ十三階奥行三百間位ノ被服製造所又ハ諸工
場モ多シ市中民ハ男女トナク衣服美々シクシテ情愛ノ深キハ
我カ国ノ比ニ非ス午後七時全地發車ス行々右傍ニ「ミソ」
シッピー」河ノ上流ヲ見左リニ市村各所ニ電灯ノ明光々タル此
夜ハ昼ノ疲レニテ夜ハ早く寝ニ就キヌ

九月 七日 水曜日晴天昨夜ヨリ本朝ニ至ル迄殆ント人家ノ絶

ユルナク各村各市ニ製造所ノ如キ大ナル建物多ク富^⑩ノ状外
面ニ見エタリ午前七時十五分「チカゴ」に到着此地ハ明治何年
タルヤ万国大博覧会ヲ開キタル米國ノ大都会ナリ此地ニ

外出ス人家四五十アリ種々ノ物品店アリ此所ヲ「キヤレスピラ」ト云フ是ヨリ河流ニ添フテ下ル途夜中人家ノ火影時々見受ケタリシ

九月 四日日曜日 晴天午前五時「バスーキーン」停車場ニ着炭水其他ヲ積込ミ消灯ス此地ハ四方広原ニシテ只ダ東南ノ一隅ニ高山突起スルノミ人家ノ区域ハ我カ壺里四方位ノ一小都会ヲナス電灯ノ余光全市ニ滿ツ市ノ状況ハ今ヲ去ル凡ソ二十年内外ニ此市ヲ作りシ新開墾ノ地ナラト云正午十二時「ジヤーネン」停車場ニ至ル此処ハ大河ノ右側ニアリ又登坂トナル午後二時二十分両山ノ間ニ広原アリテ二三ノ大湖アリ或ハ牛牧アリテ数千ノ群ヲ見ル我国ノ物ト全様ノ者アルヲ見タルナリ全四時「チーヤルスベイ」ニ着ス此処タルヤ山間ノ一市街丁度日曜ノコトトテ停車場ニハ老若男女山ヲ築キタルカ如ク人民居タリ発車ニ際シテハ「ゲートバイ」即チ我国ノ左様ナラノ別意ヲ示シ全シク午後七時「ロツキー」山絶頂ニ達シヌ停車場アリ寒烈雪降ル為ニ山溪一面銀ノ如シ百草樹木短縮ニシテ前日ノ如キ直木ヲ見ズ左側西方ニ当リテ高山アリ之レ即チ米国有名ナル「ロツキー」山ノ絶頂ナリ登上線路左右湖水アリ暫時ニシテ河流アリ此河ニ架セル橋梁百余間高幾百尺矣此処ハ我々大和男子モ肝ヲ潰シヌ是レヨリ下リ道トナリ定メシ料所多カラント車掌ニ問エバ言語通セズ去リトトモ其儘過サンニハ遺憾ナリト思慮シ此夜徴^⑧覚語ヲナシ寢室ニ去リ或部分ニ腰ヲ掛ケ四方視線ヲ注キシモ山ナク坂モ川モナク又一樹ノ生木モナシ只四方莫々タル大広原アリタリ全十時三十分ニツノ湖水ヲ右側ニ見テノ停車場アリ止車スルコト三十分全十一時左側路傍ニ湖水アリ停車場アリ止ムルコト二十五分ニシテ炭水ヲ積込ミ十二時二十分上リ列車ニ会ス此処ニテ線路ヲ替エ汽缶ニ水ヲ給メ右側ニ二三ノ湖水アリ都テ停車場ニハ風車ヲ以テ「ポンプ」ニ代用シ汽缶ニ給水スル者ナリ午後八時ヨリ翌午前二時マテ山ナク川ナク只ダ広原宛ナラテ船ニテ太平洋ヲ渡ル感アリ右側路傍ニ湖水アリ鴨ノ啼声ヲ聞ク時巳午前二時過キ

甲板洗等アリテ総テ通常服ヲ着シ檢疫◆官ノ来ルヲ待ち
 居タリ漸ク午前六時頃檢疫官ハ端船ヨリ上船シ檢疫ヲ
 始メシニ午前六時四十分頃檢疫ヲ結了七時十五分ヨリ
 「シヤトル」港ニ向ケ当所投錨セシニ其日ハ殊ニ霧濃
 クシテ四方咫尺ヲ弁セス然ルニ乗組員ト共ニ皆々如何ハアラン
 ト怪ミ思居リシニ船ハ始終汽笛ヲ鳴シツ、進行シツ、アリ
 シニ午前八時十五分頃「ウイトベイ」ト云島ニ乗セ上ケ茲ニ於テ
 乗組員沓同ハ又ハ事起リシト甲板ニ出見ルニ只舷ノ下浅
 ク真砂ノ見エルノミナリ暫ク霧モ晴レザリシカ全十時頃ヨリ
 少シク晴レタリ本船々長ニ於テハ非常ニ驚キタル模様ナリシ
 カ且又乗組員モ一時ハ実ニ驚愕ニ堪ヘサリケリ午後三時
 半満潮ニ付キ漸ク下船ス夫レヨリ直接方針ヲ計リテ「シヤト^マヤ」
 ニ向出帆全日午後七時北米「シヤトル」ニ着キタリ
 九月 二日 此日番兵ヲ除クノ外午前モ午後モ上陸ヲ許サレ適宜ノ
 散歩ヲナシ久シ振りノ事ナレバ殊ノ外愉快ナリキ
 三日 土曜日午前六時総員起シアリテ早速毛布ヲ食卓ニテ纏メ縛
 リヌ午前八時汽船金州丸ヲ退船シ総員整列ヲナシ写真ニ撮影
 シ午前九時「シヤトル」発ノ汽車ニ乗シ此汽車ハ一個ノ長サ
 十二間中十尺ノ中等汽車ニテ沓室毎ニ区分シ八十人ヲ乗
 スヘキ所ナル三千余里ノ長路ノコトニテ此沓個ニ三十六人
 ノ兵員ヲ乗シ沓個毎ニ黒人沓人ヲ「ホーイ」ヲ使役シ起臥
 掃除ノ役ニ供シ室内ニ洗面処便処アリ寒ナリシトキハ「ス
 チムパイフ」ニテ室内ヲ暖メ別ニ沓車ヲ中央ニ列シ之ヲ賄所
 トシ前部二車ニハ糧食需品其他兵員ノ所持品ヲ積載シ都
 合十沓車列車ニシテ「ヒラテルヒヤ」ニ向ケヌ此日ハ晴天ナリ
 ト雖モ十二時頃ヨリ時々小雨降り遠山ハ判然セザリシモ
 線路ノ左右ハ山トナク谷トナク雲突ク如キ米利堅松樹
 宛ナカラ麻畑ノ如シ午後二時汽缶車テ后部ニ加ヘ「カスケツト」
 山ニ掛ル全四時更ニ沓個ヲ加ヘ「カスケツト」山図ノ如キ^マ坂
 路ヲ登ル是ヨリ「スリツチパツク」ト云フ第一回ノ南角ニテ更ニ又沓
 個ヲ加ヘ遂ニ前後四個ノ汽缶車ニテ此山路ヲ登ル実ニ驚クノ外
 ナカリキ午後六時三十分稍々平坦ノ地アリ此停車場ニテ十五分間

途ヲ祝シタリ觀ルニ久敷帰朝セザルヲ思ヘバ欽慕ノ情転
起レリ然トモ本船乗組員ハ回航員ノ名ヲ以テ北米「シヤートル」
ニ向ヒ日ヲ追テ進行シツ、アルカ今ヤ横浜ヲ出テ我が住ミ馴
レシ日本ヲ後ニ見ツ、知ラヌ外国ヘ向ケシモ我等同僚ハ
是レ選抜者ナレバコソ互ニ将来ヲ祈リ或ハ語リテ何ノ心細キコト
モナク愉快ニシテ大和男子ノ心ニモ愧シサリケリ今ヤ日ヲ追テ日
サス北米ヘ向進行シタリキ抑モ此金州丸ハ客船ニアラズ
専ラ荷物搭載スル為ノ船ナレバ兵員ヲ置ク客室ナク新ニ仮リニ設
ケタル処アリ故ニ起居ニ困難ヲ来シ又船内ニ病室浴室食卓便所
等ニ至ルマデ急ニ^{ママ}⑥遊ヘシ者ナレバ下土以下ノ住居左マテ善良シ
カラス食事ハ海軍同様ナリ浴湯ハ海水ナリト雖モ毎日ノ事
ナレバ不自由ハナカリキ東京笠置事務所ニアリシトキ酒保開設ナルノ」
目的ニテ其委選ビ用意ヲナシ来リシ故十九日ヨリ船内ニ於テ開
壳セラレシナレバ飲食等ニモ不自由ハナカリキ生等カ東京ニ滞在中ハ夏
ノ真最中ナレバ寒暖計ハ通例八十七八度アリシニ船ノ進行スルニ
從テ経緯度ノ差程ニハ日本九州地方ノ十二月ノ時候ノ様ニナリ
寒暖計モ四十五六度ニ下リ凜タル凍風ハ肌ヲ劈キ或ハ静々金
波ヲ^{ママ}■リテ楽々タリ或ハ荒々怒涛来リテ船ノ動揺甚シク或ハ
濃霧ノ為メ前後咫尺ヲ弁セス或ハ晴天ト雖モ見ユル所
ハ雲ト海トノミ或ハ鯨ノ潮吹クヲ見ルコト度々ナリキ乍去今回ノ
航路ハ世界一週実ニ愉ナリト呼ヒ快ト也称セン抑モ
回航員タルヤ乗船セシヨリ今日迄嚴重ナル軍律ヲ保存スルナク恰
モ客人ノ如ク一ノ事業タモ為スナシ終日船疲ノ眠ヲ^{ママ}⑦筋ケニ小
説又ハ「かるた」ヲスルノミ若シ是レ軍艦ナレバ此安逸ナル航程
或ハ愉快ナル歡喜如何テカ為シ得可シ乎此施航ハ吾
人ニ賦与セシ天僥倖ト云フベシ横浜ヲ出デ、ヨリ十四日目
即チ八月卅日午后三時頃五六哩右手ニ帆船一隻見エタリキ翌
全月卅一日正午頃ハ米国大陸ノ近ツキシト見エ船ノ三四隻ト見エ
全日午后四時頃ハ米国大陸明瞭ニ見ヘケレバ乗組員一同ハ
上甲板ニ出テ陸地ノ近ギタルヲ喜ヒツ、話シ合ヘリ
九月 一日 午前四時「タウセント」港ニ投錨シ此処ハ即チ檢疫所ニシ
テ全日四時三十分ニ総員ヲ起シアリ早速室内掃除及ヒ上

- 八月 一日 六日迄ハ事務所ニテ自由ニ運動ヲナシ居タリ
- 八月 六日 午前八時全員ヲ整列セシメ部装配置等ヲ
 定メラレ回航員委員長海軍大佐柏原長繁氏
 及海軍機関中監倉橋半造氏等ハ兼テ米国
 エ出張中ナレバ副委員長海軍中佐伯岡氏ハ
 回航員ト共ニアリテ回航員一同万航ノ注意ヲ述
 ベラレ且ツ選抜サレタル名誉ヲ言ハレ将来回航ノ
 途中衛生上ノ事ニ付テ委シク述ベラレタリ其日夕食後
 ヨリ半舷宛五日間ノ休暇ヲ賜ハリ休暇中ハ横ス
 賀下宿ニアリ八月十五日ハ解散ノ為メ再ビ事務所ニ
 総員集合其日愈々解散ニ付テ精酒壺樽原野
 ニ出シ副長等祝辞ヲ述ベラレ回航員一同モ
 祝盃ヲ傾ケ副長万歳回航員万歳ノ大声天
 地ニ轟ケリ夫レヨリ各員荷物ハ便宜ノ個所ニ運ヒ
 十六七日ノ両日ハ自由ノ遊興ヲ尽セリ
- 十八日 午前八時東京新橋停車場ニ集合各卓長ハ人員
 ヲ調べ全員タリ当日見送り人ハ海軍省詰ノ海軍少将
 以下其他市中人民停車場内ニ満々タリ此気車ハ
 九時五分発ナレバ其前備^⑤ノ列車ニ乗組メリ発車ノ
 際ハ汽笛一声ニテ見送人ヲ壺目シタルノ二品川駅ニテハ觀
 送人^マ今や來ルカト待受タル模様ナリシカ該車ハ横浜直
 行ニシテ停車ヲナサズ故ニ我等一同ノ通行ヲ見テ大謁一声」
 万歳ヲ謁ヘタリシモ何ゾ計ラン其何人タルヲ知ラズ九時
 五十分横浜停車場ニ到着海岸蓬來屋前ニ集合十一時頃
 通船ニ乗シ小蒸汽船又ヲ引テ沖ニ投錨セル汽船金
 州丸ニ着各乗船シ上甲板ニ整列ノ船長及医師ノ挨拶ヲ
 受ケタリ金州丸ハ正午十二時二十六分頃ヨリ錨ヲ上ケ汽笛ヲ
 鳴ラシツ、横浜港ヲ出船ノ途ヲ付キタリ送別委員ハ小蒸
 汽船ニ乗シ又横ス賀港ヨリ横ス賀丸ニテ軍艦旗ヲ揚ゲ
 軍樂隊^マヲ奏シ回航員一同ハ上甲板ニ出テ水兵
 ハ「リギン」ニ高ク登リ総員帽子ヲ振テ勇々敷別ヲ告ゲタリ
 此時諸外国軍艦五六隻アリシガ総テ満艦飾ヲ揚ゲ我等首

宮崎	二キ兵	平塚 麻太郎	山口	二信号	田中 太郎吉
山口	〃	山口 幸四郎	宮城	〃	小野寺 寅之助
佐賀	〃	野田 勘藏	大分	二主	坂藤 良太郎
長野	〃	吉沢 森之助	山口	〃	棟居 祝吉
長崎	〃	瀬崎 栄三	鹿児島	〃	鳥越 孫太郎
〃	〃	本村 万吉	東京	三等兵	小柴 金太郎
福岡	〃	藤井 倉吉	〃	ポイ	小坂 幸平
〃	〃	佐伯 新作	〃	トコヤ	鈴木 勝五郎
〃	〃	柴田 直作	京都	コック	中村 政五郎
熊本	〃	小山 政治			
〃	〃	高橋 六平			
鹿児島	〃	吉満 熊助			
〃	〃	岩切 熊十郎			
〃	〃	堀切 伊吉			
兵庫	〃	中濱 亀太郎			
長野	〃	有馬 信一郎			
福島	〃	紺野 欽藏			
長崎	〃	高原 亩次郎			
青森	三キ兵	吉崎 勲			
宮城	〃	阿部 幸四郎			
〃	〃	鈴木 亩次			
愛知	二鍛冶	谷口 和三郎			

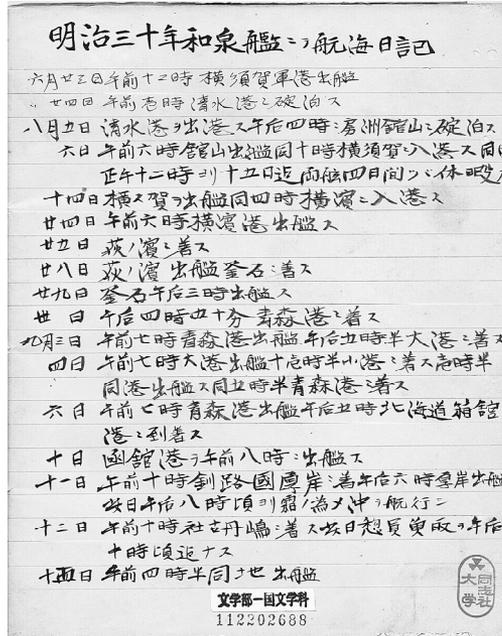
福岡	一キ兵	船津 寶貫	大分	〃	中村 三代造
岡山	〃	堀川 大吉	佐賀	〃	福山 辰市
山口	〃	金子 松太郎	〃	〃	緒方 米吉
〃	〃	惠本 作治郎	新潟	〃	青木 治太郎
大坂	〃	大利 定次郎	崎玉	〃	立沢 庄右工門
京都	〃	濱中 長兵衛	三重	〃	山下 藤五郎
長崎	〃	大黒 新三郎	〃	〃	伊藤 清太郎
〃	〃	濱脇 源藏	福岡	〃	酒井 弥右工門
佐賀	〃	井上 祖苗	〃	〃	松本 四良平
熊本	一鍛冶	入江 傳藏	〃	〃	秋吉 主税
神奈川	一木工	木下 富三	山口	〃	浅野 音治郎
長崎	一主	一番ヶ瀬 高市	鳥根	〃	伊藤 周助
〃	〃	堤 與作	静岡	〃	加藤 太郎
宮城	〃	菅原 直次郎	徳島	〃	中川 國之助
鹿児島	〃	坂口 與三兵衛	岡山	〃	福本 外吉
愛媛	〃	松川 光孝	静岡	〃	市野 五良作
福岡	〃	田中 格次	愛知	〃	丹羽 米吉
鹿児島	一木工	川路 宗助	〃	〃	川村 金次
広島	一信号	松本 静司	〃	二キ兵	野田 健次郎
鹿児島	二水兵	西代 次良八	〃	〃	伊藤 儀次郎
〃	〃	新 吉太郎	宮城	〃	角張 今朝吉
宮崎	〃	富山 喜惣治	大分	〃	小嶋 繁

宮崎	一水	池田 福松	静岡	一キ兵	出村 隆
長崎	〃	田川 茂三良	福岡	〃	山野 熊太郎
三重	〃	山口 作次良	島根	〃	三代 與市
佐賀	〃	川原 鶴次良	〃	〃	村上 定右工門
〃	〃	永石 増市	大分	〃	高山 未藏
宮城	〃	山田 今朝五良	三重	〃	馬場 亀三郎
大分	〃	角間 千代藏	〃	〃	中西 友吉
熊本	〃	家入 又彦	宮城	〃	請野 貞輔
◆◆	〃	有馬 至	〃	〃	増間 清三郎
千葉	〃	佐々木 京次	〃	〃	庄司 門三郎
愛媛	〃	岸井 雅一良	鹿児島	〃	豊田 四良左工門
〃	〃	広瀬 高次	〃	〃	平島 祐通
山口	〃	平田 久松	〃	〃	武 幸平治
鳥取	〃	小谷 欽太良	高知	〃	鈴木 吉之助
熊本	〃	岩坂 松三良	新潟	〃	小山 作七
岡山	〃	早内 幸平	愛媛	〃	平井 平松
青森	〃	菊地 彦太良	全	〃	左右都 文吉
石川	〃	毛利 豊正	兵庫	〃	大橋 兼吉
佐賀	〃	大島 傳藏	山口	〃	末富 槌熊
	〃	堰 藤次良	〃	〃	安達 長兵工
愛知	〃	宮嶋 衆次	石川		川尻 幸四郎
佐賀	一等機関兵	相嶋 佛吉	宮崎	〃	藤沢 末松

広島	二兵曹	吉田 種吉	熊本	〃	宮崎 三次良
山口	〃	中村 楝吉	山口	〃	吉松 徳太良
佐賀	〃	西岡 文吉	広島	〃	細田 三太良
山口	二水信号兵曹	御國生 万吉	鹿児島	三兵曹	高野 直吉
東京	二水機関兵曹	志村 道錦	広島	一水	泉 省三
鳥取	〃	永見 能太郎	千葉	〃	◆村山 万次良
徳島	〃	椎野 秀太郎	熊本	〃	三代 喜又
島根	〃	木村 末吉	〃	〃	明石 松太郎
鹿児島	〃	野村 喜三郎	〃	〃	原 幸太郎
〃	二鍛手	丸岡 太良左工門	鹿児島	〃	宮内 宗之丞
大分	〃	武田 松太郎	〃	〃	后藤 二助
宮城	二等手	長友 兼之助	〃	〃	池田 佛咲
愛知	二筆	滝 吉五郎	島根	〃	錦織 寿之助
佐賀	三兵曹	藤崎 武八	福井	〃	沢山 万治郎
長崎	〃	宮田 嘉藤治	長崎	〃	前川 友太郎
山口	〃	沖原 千代姦	広島	〃	岡山 亀次郎
島根	〃	矢沢 佛三良	千葉	〃	小島 秀吉
大分	〃	坂本 小平	愛知	〃	森田 芳弥
宮城	〃	吉田 重平	〃	〃	梅田 籙助
鳥取	〃	戸島 亀太良	〃	〃	川合 春四良
鹿児島	〃	酒匂 彦能	〃	〃	中江 鉄太良
島根	〃	丸毛 此吉	〃	〃	大野 甚助

住所	等級	姓名	住所	等級	姓名
東京	海軍大佐	柏原 長繁	広島	掌砲長	
広島	全中佐	佐伯 閏	愛知	掌水雷長	近藤
	機関中監	倉橋 半藏	山口	上等機関兵曹	北川 喜代造
高知	中佐	奥宮 衛	広島	全	三宅 十助
	少佐	井内 金太郎	大分	全	山口 良一
愛知	全	土屋 光金		船匠師	沖松 太郎
	機関少監	秀島 熊六	長崎	全	島田 秀四郎
兵庫	大尉	武部 片四郎	広島	上水兵曹	上信 音藏
	全	關 重孝	全	全	大野 千松
東京	全	佐々木 高志	下士卒		
宮城	大軍醫	鈴木 倚像			
滋賀	全	隠岐 敬二郎	山口	一兵曹	伊東 壮一
高知	大主計	中濱 敬三郎	鹿児島	〃	竹下 喜之助
東京	全	三沼 稲二郎	山口	〃	原田 清
鹿児島	中尉	伊集院 俊	高知	〃	井上 兼太郎
熊本	全	内田 扉三郎	鹿児島	一キ曹	大迫 仁之助
高知	中機関士	關徳 鹿■ ^②	〃	〃	矢崎 鉄太郎
佐賀	全	牧原 雄勇	熊本	〃	山代 喜一良
広島	少尉	松村 菊男	高知	一水看護手	河野 良太
佐賀	全	③	鹿児島	一水厨宰	満田 彦太良
全	掌帆長	副島	愛知	二兵曹	金沢 ■ ^④ 市
東京	機関兵曹長	山岡 憲次	〃	〃	后藤 鎌吉

- 六日 午前七時青森港出艦午後五時北海道箱館
港ニ到着ス
- 十日 函館港ヲ午前八時ニ出艦ス
- 十一日 午前十時釧路国厚岸ニ着午後六時厚岸出艦
此日午後八時頃ヨリ霜ノ為メ沖ヲ航行シ
- 十三日 午前十時社古丹島ニ着ス此日惣員魚取ヲ午後
十時頃迄ナス
- 十四日 午前四時半同地出艦』
トナル十二時ヨリ休業ス
- 十五日 午前九時ヨリ艦隊司令長官点検アリ
- 十七日 午前八時清水港出艦午後四時江ノ浦ニ投錨
〃四時半陸戦隊ヲ沼津三島ニ向ケ上陸ス
- 十九日 午後一時江ノ浦出艦〃三時清水港ニ投錨ス
- 二十三日 午後四時五十分清水港出艦ス
- 廿四日 午前十時半志洲鳥羽港ニ投錨ス十二時ヨリ
伊勢參宮ノ為メ二十四時間ノ休暇有リタリ
- 廿六日 午後三時半志洲鳥羽出艦ス
- 廿七日 午前七時半ニ清水港ニ投錨ス九時半ニ分隊
点検有リ
- 三月 二日 午前八時清水港出艦ス午前十二時ヨリ体重検
察有リ午後十時半頃房洲館山ニ投錨ス
- 三日 午前七時半房洲館山ヲ出艦ス〃十一時ニ横ス賀
軍港ニ投錨此レヨリ予備艦トナル
- 二十三日 午後一時和泉艦ヲ退艦シ海兵団ニ入団ス
- 廿七日 午前九時半分隊点検有リ午後ヨリ航海休暇
十日間ヲ賜ル
此ノ休暇海兵団定員トナリ
- 七月十九日 笠置回航員ヲ命セラル
- 七月卅一日 東京築地中学校内事務所ニ◆◆至リ又此
時回航委員ノ人名ヲ右ニ記ス』^①



明治三十年和泉艦ニテ航海日記

- 六月廿三日 午前十二時横須賀軍港出艦
- 〃 廿四日 午前七時清水港ニ碇泊ス
- 八月 五日 清水港ヲ出港ス午後四時ニ房洲館山ニ碇泊ス
- 六日 午前六時館山出艦同十時横須賀ニ入港ス同日
 正午十二時ヨリ十五日迄兩舷四日間ツマ休ムス
- 十四日 横須賀ヲ出艦同四時横浜ニ入港ス
- 廿四日 午前六時横浜港出艦ス
- 廿五日 萩ノ浜ニ着ス
- 廿八日 萩ノ浜出艦釜石ニ着ス
- 廿九日 萩ノ浜午後三時出艦ス
- 卅日 午後四時五十分青森港ニ着ス
- 九月 三日 午前七時青森港出艦午後五時半大港ニ着ス
- 四日 午前七時大港出艦十時半小港ニ着ス七時半
 同港出艦ス同五時半青森港ニ着ス

4 略字，俗字，合字等は原則として通行の表記に改めた。

5 判別不可能な箇所は■，消し跡と思われる箇所は◆で示した。

二、原文の旧字，異体字について，検索の便をはかるため本稿では以下のように改めた。

原文	本稿	原文	本稿	原文	本稿	原文	本稿
航	航	迄	迄	舩	船	雪	雪
館	館	萬	万	霧・處	処	谿	溪
濱・濱	浜	撰	選	虽	雖	楫	橋
國	国	聲	声	賣	売	彗	多
嶋・寫	島	夷・叢	轟	從	從	俣	儘
魚	魚	宜	宜	鯨	鯨	寐	寢
檢	檢	停	停	柳	抑	拂	扨
戰	戰	場	場	實	実	舉	挙
體	体	將	将	嚴	嚴	尢	尤
豫	予	滿	滿	兹	茲	壓	圧
團	团	汽	汽	寫	写	勸	勸
參	参	觀	觀	罐	缶	應	応
回	回	醫	医	圖	図	怨	恋
廣	広	樂	楽	第	第	藝	芸
高	高	轉	転	燈	灯		
崎・崙	崎	假	仮	會	会		

三、上記異体字以外の，筆者独自の用字法のうち頻出するものについては，文脈を考慮したうえで，以下のように改めた。

原文	本稿	原文	本稿	原文	本稿	原文	本稿
電	雷	骨	骨	撰	選	堪	堪
能	熊	斃	斃	暖	暖	物	物
午	牛	健	建	徑	経	百	百
枚・枚	牧	関・関	開	接	様	洲	州

日々遭遇するアメリカの風土や文化に驚きながらも、冷静に「我国」との差異を捉えようとする谷口の記録。例えばこれを、数年後に渡米する永井荷風の『あめりか物語』や、『西遊日誌抄』のような文章と並べてみるのも興味が深い。下級軍人である谷口と、既に作家として地歩を占めつつあった荷風とでは境遇も教養も全く異なるが、一渡米者同士として見る限り、両者の距離はさほど隔たってはいまい。むしろ本稿は、谷口の日記にいわゆる「文学的価値」を見出すものではない。しかし両者の「日誌」と、『あめりか物語』のような文学作品とを比較の俎上に載せる時、何を以って「文学的」文章と見なすのか、その領域をめぐる問いをも惹起することになるだろう。

あるいは、同時期の日系アメリカ移民達が、移動と定住の不安定な生活の中で綴った種々の文章と、谷口の記録には、どのような共通性と差異が見られるだろうか。そもそも海軍が「笠置」建造をアメリカに発注した理由は、日米移民問題の摩擦に対する外交上の配慮であった。他者への歓待を理念とするアメリカ合衆国が、外交レベルにおいて「異域ノ者」への隠微な排除を遂行してきたことは、日系移民史の示すところである。国際的な資本競争と、諸国家のパワーゲームの狭間で、谷口と日系移民達は同時代の表裏を生きている。明治期の日米関係をミクロな言説から捉える文脈においても、本稿は資料的価値を有すると言えよう。

〈歴史〉の積層に埋もれた個人の言葉を、現代の公的な領域に開くこと。今回の翻刻は壮大な目標に向けての、ささやかな試みの一つである。なお、原資料ノートの70頁中、本稿は21頁分にあたり、残りの頁は別の軍務中に書かれた「明治三拾五年英国皇帝皇后両陛下戴冠式ニ付浅間ニ（テ）航海日記」となっている。こちらも順次、翻刻予定である。（佐藤貴之）

【凡例】

一、資料を忠実に翻刻することを原則としたが、以下の校訂方針に拠った。

- 1 原則として改行、空白は資料の通りとした。ただし、日付については表記の幅を調整した。原文の改頁箇所は、**】**で示した。
- 2 漢字は原則として、通行の字体に統一した。改めた旧字、異体字については対照表を作成した（凡例二、参照）。また、筆者独自の用字法のうち頻出するものについては、通行の表記に改めた上で対照表を作成した（凡例三、参照）。ただし、人名の漢字に関しては全て資料の通りとした。
- 3 仮名遣い、清濁は資料の通りとした。また漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字と思われるものにはママのルビを付した。

記録するだけのものである。

その単調さに自ら飽きたのか、同年の日記は9月27日で途絶え、翌明治31年3月2日にまで日付が飛ぶ。同月23日に「和泉」が予備艦となり、谷口らも退艦して予備役（海兵団員）となる。ここで再び数ヶ月ほど日記が中断しており、どうやら谷口は特筆すべき事柄のみ記す方針をとったようである。7月、近日竣工の新型防護巡洋艦「笠置」をアメリカで受領する回航員に任命される。先に触れた名簿は、この「笠置」回航計画を任された委員の名簿である。8月中旬、副長・佐伯間を筆頭とした谷口ら回航員は、横浜港から輸送艦「金州丸」に乗船し、アメリカ・シアトルに向かう。この出発前後より記述量が増大し、一日分の記録に数頁を費すようになっていく。渡米に際する谷口の興奮の様子がうかがえよう。

シアトル到着後、回航員は大陸横断鉄道で一路フィラデルフィアへ。シアトルからは一週間ほどの旅程に過ぎないが、この間の記述が日記全体において割合として一番長い。フィラデルフィアに到着すると、回航員は即座に乗船準備に取りかかり、10月24日に竣工した「笠置」を受領する。11月初頭に出艦した「笠置」は、ニューヨークなどの都市に寄港したのちアメリカを離れ、イギリスの「アームス」（アームストロング）社にて兵装を搭載する。「笠置」運行こそが回航員として最も重要な任務のはずだが、出艦後の記述量は大幅に減っていき、明治32年3月30日を以て日記は閉じられる。なお、同年5月16日に「笠置」は横須賀港に到着している。

以上の概観から分かるように、実は題名の「和泉」艦航海に関する記述はごく僅かである。「和泉」搭乗中に付けはじめ、しばらく放置していた日記を、「笠置」回航員に任命された折に再開したのであろう。初めから明確な目的をもって綴られた記録ではないと思われる。

全体を通して、軍艦「笠置」竣工という〈歴史〉的事実の側面を見る面白さもあるが、やはりこの日記の見所は、アメリカ・フィラデルフィアへ向かう道中の見聞録の記述だろう。大陸横断の途中、セントポールやシカゴで谷口らは市街を見物し、アメリカの桁違いの物質的豊かさに圧倒される。ここで興味深いのは谷口が、巨大建造物の威容と並列させるように、繰り返し「米人」の「情ノ厚キ事」に言及している点だ。例えばミシガンの駐車場で「老若男女」による歓待を目の当たりにした谷口は、「異域ノ者ト侮ラス其情深キ事我人ノ及ブ所ニアラス」と書きつけている。多様な「人種」、異域ノ者」達が交通し、富み栄えるアメリカ合衆国という像。「米人」の精神的豊かさに感服しながら、谷口は「我人」が目指すべきモデルケースとして、国際社会に適応した近代市民の姿を観察しているように思える。

翻刻 谷口和三郎「明治三十年和泉艦ニテ航海日記」

翻刻
谷口和三郎「明治三十年和泉艦ニテ航海日記」

佐藤貴之・グレゴリー・ケズナジャット・
福岡弘彬・李春草・林麗婷・真銅正宏

解題

本稿は、明治期の一軍人、谷口和三郎が記した「明治三十年和泉艦ニテ航海日記」（同志社大学図書館蔵）の翻刻である。原資料は縦22cm×横18.5cmの黒表紙のノートに横書きで記されている。日記の内容は、明治30年6月から32年3月にかけての、軍務中の航海とアメリカ大陸横断の体験を書き留めたものである。公刊や機関への提出といった目的はなかったと推測される。

まず断っておくと、谷口和三郎は、日本の近代史や文学史の記述に現れるような著名人ではない。彼の素性は未詳だが、日記内の名簿によれば出身は「愛知」、海軍での等級は「二鍛冶」（二等鍛冶手）となっている。同名簿には、柏原長繁や奥宮衛など、のちに日露戦争で軍艦艦長を務める海軍将校の名も見えるが、彼らと違って谷口は二等下士官に過ぎない。そのような無名の人物の私的な日記を翻刻する意義はどこにあるのか。

確かに彼の残した記録は、大文字の〈歴史〉に影響を与える史料とは言いがたい。しかし、公開を前提せず綴られたものだからこそ、この日記は、明治に生きた人間の日常感覚と、異文化に初めて触れた日本人の驚きを生の形で伝えてくれる貴重な資料となっている。むろん、軍務中の日誌という体裁上、谷口の文章には規律的な意識が働いている。明治期における私的領域と公的領域の交錯地点、そのあわいにある個人の言葉を発掘すること。それが本翻刻の意図の一つである。

日記の叙述と、書かれている出来事について若干の注釈を加えておく。題名からも分かるように、この日記は、防護巡洋艦「和泉」搭乗中の航海日誌として書き出されている。「和泉」は明治27年、イギリス製軍艦「エスメラルダ」を帝国海軍が購入して改称したもので、明治28年2月より横須賀で方面警備に従事していた。谷口の日記にも明治30年6月から9月にかけて、「和泉」が横須賀周辺と北方との往復を繰り返して巡察を行う様が記されている。この箇所叙述は非常に簡略で、土地名と出港・着港の日時を